

2003年夏休み友情のレポーター カンボジア取材レポート

「友情」 丹沢 慶太（山梨県 / 当時 12 歳）

2003年夏 タイ、カンボジア取材旅行・日程

取材行程 8/17（日）～8/27（水）

- 8/17 成田（発） バンコク（着）
- 8/18 タイ、カンボジア国境付近で取材
- 8/19 国境付近、カンボジア側付近スラム街を取材
- 8/20 バットンバン、自立支援施設「若者の家」を取材
- 8/21 「若者の家」ストリートチルドレン保護施設「ホームランド」
- 8/22 午後アンコールワット遺跡見学
- 8/23 アンコールワット遺跡見学
- 8/24 プノンペンの援助施設「若者の家」取材
- 8/25 ゴミ山で働く子どもたちとそこで援助活動を行う現地 NGO 取材
- 8/26 プノンペン「若者の家」職業訓練を取材
- 8/27 バンコク発 成田着

カンボジアの国について

宗教	仏教
首都	プノンペン
民族	85%クメール族 その他 チャム族 ベトナム系
公用語	カンボジア語（クメール語）
面積	18万1040平方キロ 日本の約48%
気候	亜熱帯圏
	5月中旬～11月中旬＝雨季＝何回もスコールもあった
平均気温	27 前後 もっとも暑い時期は40 をこす

覚えたクメール語

こんにちは	チュムリアップスーオ
お元気ですか	ソックサバーイルテー
どうもありがとう	オークンチュウラン
すいません	ソームトー
どういたしまして	オッエイテー
さようなら	チュムリアップリア
わたし	クニョム

いち日遅れて8月28日学校へ登校した。何か気恥ずかしかった。教室へ入ると友達が「けいた、おかえり！！」「けいたカンボジアどうだった」「おまえ真黒になったなあ」「おみやげはないのか？」「新聞にのっていたね」などとみんなが声をかけてきてくれまわりに寄ってきてくれた。先生も「けいたみんなの前でカンボジアの取材の話をしてみる」と朝の学活で話すことになってしまった。ぼくは突然だったので何を話してよいのか考えたけれど自分が見てきたことを話した。飛行機の中でのできごと、僕たちのように毎日学校に行けるわけではなく、同じくらいいや僕たちよりも小さい子どもたちがバツタをとってその足や手をとって煮たり焼いたりして売って、生活を助けている子どものことや、自分より年が上なのに身長が同じなのはびっくりしたことや、家族と暮らせない子どもたちのことや、アンコールワットの階段があまりにも急だったことなどを話した。上りやすく工事して直して欲しいなどと思ったことも話してしまった。でも一番伝えたかったことは同じ世代の子どもたちが一生懸命にがんばっては真剣に生きていることを伝えたかったし伝わったと思う。先生も時間をとって、もっとくわしく話をしてほしいといってくれた。最後にカンボジアでは200円でTシャツが買えたことを話すとみんなはもっと驚いた。

これから丹沢慶太のカンボジアの取材レポートの旅をはじめます。カンボジアで親友になったトリーアのことを思い出しながら。。。

第1日目 期待と不安でドキドキ - 重い大きい荷物を持って -

甲府駅を出発する。カンボジアへ取材に行く。期待はあるけど本当はすごく緊張していた。これから、どういうことが待っているのか。泣きたいくらいだった。八王子の駅あたりまでずっと下をむいていた。

新宿駅でおばさんとお兄ちゃんの顔がみえた時、本当に泣いてしまいたいくらいの気持ちだった。金さんや菜津紀さん、清水さんが待っていてくれ、気持ちが変わった。

「さあ頑張るぞ！！」と自分に言った。

「けいた君、大きいかばんね、お母さんがこの中に入っているの」とみんながひやかしてくれ、気持ちが楽になった。みんなありがとう。僕は応募動機の中でサッカーや太鼓を通して現地の子供たちと友情を結び日本と海外の架け橋になりたいと書いた。太鼓は重いということで持っていけなかったことは残念だったけれど、サッカーできることがとても嬉しかった。はやくサッカーを通じて友達になりたいかった。ぼくにあたえられた役目をしっかりやろうと心にきめ、期待と不安を抱いて飛行機は、離陸していった。

いってきます

第2日目 大都会バンコクそして国境の市場 - はじめての取材緊張モード -

タイの食事は辛かった。口から火を吹くくらい辛かった。朝の8時になると国歌が流れ歩いている人は帽子をとり立ち止まるのだ。これには文化の違いを感じて驚いた。バンコクの街は大都会だった。あちこちに日本の会社の名前があったり、セブンイレブンがいっぱいあると兄から聞いていたけど本当だった。まるで日本の街を歩いているようだった。ちょっとショック！！大都会のバンコクから4時間半ぐらいかけて国境付近のタイとカンボジアのアランヤプラートの大きな市場で働く子どもを取材した。はじめての取材で緊張しまくっている。菜津紀さんは積極的に質問しているので僕も勇気を出して取材をはじめたが、なかなかうまくタイミングをとることができず、その場に立っているだけだった。これではいけないと思いデジカメで興味をひくとみんなが集まってきてくれた。言葉はわからなくても一生懸命話かけてくれることが嬉しかった。けれどバツタの足や手をとって売っている姿は僕に衝撃を与えた。その子どもたちの手はバツタ色に染まっていたからだ。この子どもたちは国境が開くといっせいにカンボジアから国境を越えてタイのこのマーケットに働きにきているという。その中でトーンという女の子に質問してみた。

トーンに聞いたことは

- ・ 将来の夢は・・・？
英語の先生
- ・ どのような努力をしていますか・・・？
今は行っていないけどときどきは学校へ通っている
- ・ 何歳ですか・・・？
12歳

と答えてくれた。自分のインタビューに自信がついた。

トーンから逆に質問してきた。それは家族構成を教えて、そして僕の兄弟になりたいというのだ。僕は家族構成は教えたけれどあとの質問には答えられなかった。少し複雑な思いだった。過去にトーンはつらい思いやさみしい体験してきたのだろうかと考えてしまった。でもトーンに英語の先生に絶対なって下さいというと笑顔を返してくれた。ホッとした。日本での自分の生活とはあまりにも違うことに驚いた1日だった。今日は疲れた。

第3日目 カンボジアのスラム街・実家訪問

- 徒歩で国境通過 カンボジアに入る -

国境付近に行き若者の家の男女一人ずつを待っていたら、昨日出会ったトーンたちが笑顔でやってきた。

本当に人なつこかった。離れるのが大変だったしさみしかった。

ティーアとティーランに会う。ティーランは親が残してくれた家を KnK からお金を借りて裁縫の技術を身に付けたから家の前にお店をだして働き儲かったお金で KnK に返すそうだ。そして、家を見せてもらった。

ドミニクがもし一言しか言えなかったら何と言う言葉を使うかと質問してきた。僕は《努力》という言葉を使った。努力することは大切だ。努力することは、たとえそのことが達成できなくてもその途中一生懸命頑張ったことはとても大切だから。ティーランも努力して裁縫を習ったのだから。

第4日目～第5日目 バタンバン「若者の家」・「ホームランド」取材

- 13歳の誕生日みんなが祝ってくれた オークン -

バタンバンの若者の家に着くと、みんなが笑顔で迎えてくれた。教室を覗くと掛け算をしていた。みんな元気に僕に声を掛けてきてくれた。待ちに待っていたサッカーがみんなとできる。遂にこのときがきた。でもみんな裸足だった。驚いた。何回も何回も足を踏んでしまい悪い気がした。どうして僕も裸足でしなかったんだろうと終わったあと考えた。やはりサッカーは靴を履いてするスポーツだから当たり前だと思っていたと思う。でもここでは違うのだ。みんなすごく上手だった。トリーアとトーンという少年、少女仲良くなる。

夜、僕の13歳の誕生日をしてくれた。まさか誕生日をしてくれるとは思わなかった。劇やダンスも披露してくれてカッコよかった。みんながハッピーバースデーの歌を唄ってくれ、プレゼントをくれたり、僕は涙がでそうだった。特に嬉しかったのは、トリーアからももらったクマの置物だ。僕のためにわざわざ買ってくれた。カンボジアでももらった13歳の誕生日一生忘れないだろう。みんなオークン！みんなからのプレゼント一生の宝物だオークン！

翌日、バタンバンの刑務所の視察に行った。2つも扉があり頑丈そうだった。みんな同じ水色のふくをきていた。読み書きが多少できる子どもとぜんぜんできない子どもの教室が2つあった。お金がないために弁護士を雇えず軽い刑の子どもも1年以上いることに驚かされた。

第6日目～第7日目 アンコールワット遺跡見学 - 驚きと恐怖の体験 -

アンコールワットは想像していたより何倍も大きく、木が宮殿を覆っているところもありその雄大さに驚かされた。しかし、階段があまりにも急で狭く落ちてしまいそうだった。ここで落ちて死んでしまった人もいたそうだ。自然ではなく人工的に作られたところもあり、やはり自然のままがいいと思った。でも、階段だけは工事をしてほしいと思った。こども6人にドミニクが質問した。幸せってなんだと思う？小さい幸せとは？そして友情とは？____ 人間性だと思う。やはり人間性がないと友情は結び付かないと思う。トラフィックチルドレンの話聞いたときはショックだった。今、たぶん若者の家はかれらにとって幸せな場所だと思う。

第8日目 お土産の日 - たまの休日 -

市場で、日本では靴が高いけれどもここではナイキの靴が15ドル(約1600円)で買いました。ハンモックを買いましたが、庭につける時間がありません。

第9日目 プノンペン郊外のゴミの山 - 日本では信じられない光景 -

酸っぱいごみの臭いにすぐに気持ちが悪くなった。ごみを運ぶトラックがやってくると、自分たちよりも小さな子どもたちが命がけでごみを拾っている。「トラックから捨てられるごみに生き埋めになったり、ひかれたりする子どももいる」と聞いた。日本ではありえない、信じられない光景だった。現実を見、ショックだった。

第10日目 職業訓練所を取材 - 木彫りの技術をしっかり見た -

彫刻刀のような道具を使い石でたたきながら木を掘っていく技術を見た。

「おなかいっぱい食べたい」その言葉が、僕をカンボジアへ連れていってくれました。選考の結果を聞いたとき大声をだしてしまったぐらい嬉しさと、現地でこどもたちと会える楽しさ、そして僕の応募動機や「ある日突然」のレポートが認めてもらったことが最高だったからです。僕を選んでくれたことに感謝します。二度とできないすばらしい体験をさせてもらったことは、僕自身を大きく成長させてくれました。それは、今の自分に甘えていると言うことがわかったからです。学校に行きたくても行けない

子どもたちがたくさんいることを知らされました。僕は小学校の時からサッカーばかりしていて勉強は二の次でした。でもカンボジアからかえってすぐに学校で行われた試験に、いつもだったらすぐに諦めてしまう自分だったのに、この試験は最後の最後まで頑張っていたより良い成績がとれたことは、自分の肌や、自分の目でいろいろなことを体験してきたからだと思います。二年生になったらカンボジアやタイの子どもたちからもらった勇気と努力する大切さを大事に学校生徒会役員に立候補しようと思います。そして僕は、言葉は通じなくても必ず言葉は通じ合うこと、同じ世代の子どもたちが大変な環境の中で一生懸命生きている様子を僕が見てきたままに、タイやカンボジアの現状を知ってもらい、同世代の僕達は何をしたらよいのか、ぼくたちのできることは何か、みんなと話し合い行動に移して行こうと思います。僕のいる竜王中学校とタイやカンボジアの子どもたちと友情の交流ができるように頑張りたいです。

前にも書きましたが、地元の新聞社から取材を受けたり、出発の日が近づいてくると期待と不安でいっぱいでした。出発の日、泣きたい気持ちをおさえて新宿駅に向かった時と、今の気持ちは180度違います。たった10日間だったけれどその内容は一生の間で経験できることがない貴重な10日間でした。そして僕に知らない世界を教えてくれた10日間でした。それは、衝撃や感動でした。成田から新宿駅に帰るとき達成感でいっぱいでした。すがすがしい気持ちで取材は終わりましたが、これから、この経験を活かしていろいろなことに挑戦していくつもりです。まだまだ僕の旅は続きます。

最後になりましたが、僕と10日間一緒に同行して下さった国境なき子どもたち事務局のドミニクさん、時々冗談をいって僕を笑わせてくれました。新宿駅で別れるとき抱いてくれた胸は温かかったです。僕達の事をいつも心配してくれお姉さんのように優しく接してくれた金さん。汗だくになりながら一生懸命僕達をビデオに収めてくれていた清水さん。そして、友情のレポーターとして一緒に行動してくれた安田菜津紀さん、迷惑ばかりかけてしまいました。本当にすみませんでした。でも、最後まで頑張れたことはふたりの誇りだと思います。皆さんに出会えたことはこれから始まる僕の人生の中で最も大切な出会いになりました。国境なき子どもたちの一員になれたことは本当に嬉しいです。

サッカーの試合中、腕を骨折してしまうアクシデントがありました。このレポートを仕上げる途中だったのでくやしかったけれど、最後まで自分で仕上げることができ良かったです。左手で打ちました。本当にありがとうございました。オークン。

2003年 夏休み友情のレポーター 丹沢 慶太

2003年夏休み友情のレポーター カンボジア取材レポート

安田 菜津紀 (神奈川県 / 16歳)

どれほどの時間があれば
涙を使い切れるのだろう
泣いても泣いても
歩いてきた道は消えてくれない
なのに
この道を後戻りすることもできない

はじめに

今からおよそ30年前、この国はポルポト政権の恐怖政治のもと、
全体の3分の1もの国民が殺されるという悲劇の中にありました・・・
想像を絶する拷問の末殺されていったのは 知識人や、教師や、技術者たち・・・
社会を支える人々を失い、社会は混乱への道を辿っていきました
今必死立ち上がろうとしているカンボジアに
私たちは十日間の取材へ行ってきました

カンボジア王国

Kingdom of Cambodia

面積 18万1000
人口 1300万人 km²
首都 プノンペン
気候 年中高温多湿 (5～10月雨季、11～4月乾季)
言語 クメール語
通貨 リエル (Riel)

もしもカンボジアが1000人の村だったら・・・

～カンボジアは今～

ネオンの光に囲まれても
寂しそうな顔をしている人
目的地に向かって足早に
ただ無表情に歩いていく人

少し、足を止めてみてくれませんか？
少しだけ私の話を聞いてくれませんか？
この夏私が訪れた村のことを
あなたの視野を、少しだけ世界へ向けられるかもしれません

カンボジアには1300万人の人が住んでいます
この国をもし、1000人の村に縮めるとしたら
600人は子どもです
400人は大人です
そう、この村の半分は子どもなのです

かつてこの村には、1500人の人が住んでいました
それは、30年前のことです
この村を治めていた人がつみもない人々を次々と殺していきました
500人の知識ある人や、先生や、技術者が、
ひどい拷問の末殺されました

村を支えていく人々がいなくなり
村人は混乱しました

1000人の村人のうち
4人が地雷で手足がありません
8人がエイズで苦しんでいます
けれどこの村にお医者さんはめったに現れません

たくさんの貧しい家々が並ぶこの村で、
今、子どもたちが苦しんでいます

600人の子どものうち、
290人が小学校さえ卒業できません
それ故400人の大人のうち、
140人が文字が読めません

そして、どれだけの子どもが路上で暮らしているのか
その数は分かっていません。。。
けれどこの村を歩くといたるところで
物乞いをしたり、本を売り歩いたり
重そうな荷物を背負った子どもたちに出会います
どれだけの子どもたちが人身売買され、
隣の少し豊かな村で働かされているか
その数も分かっていません
けれど隣の村に入るとすぐに
物乞いさせられている子どもたちに出会います
そして更にその村を進むと
売春させられている少女たちがいます。。。。

来年この村には、26人の赤ちゃんが生まれ
村は1026人になります
けれどこのままでは
3人の子どもたちが5歳までに死んでしまいます
そして生き残った23人のうち
11人が栄養が十分に取れなくなってしまう

子どもたちを守れるのは誰ですか？
この村を救えるのは誰ですか？
さあ出発！！その前に。。。。

聞かせて！！ 日本の子にインタビュー

Q カンボジアのイメージは？

う～んやっぱり貧しい国っているイメージがあるかなあ。治安が悪くて危ないんじゃない？あとはTVとかでたまに地雷のことをやってたりするよね。あれにはすごくショックだったなあ。。
でもあんまりつながりのある国じゃないから知らないっていうのが正直あるよ。

Q トラフィック・チルドレン、ストリートチルドレンを知ってる？

ストリートチルドレンって路上で生活してる子どもたちだよ。親がいないのかな？でもトラフィック・チルドレンっていうのは初めて聞いたよー！どんな子たちなの？

Q カンボジアの子どもにどんなことを聞いてみたい？

そうだねえ、質問するのって難しそうだよ。相手を傷つけないように色々考えながら聞かなきゃだよ。。
一番聞いてみたのは将来の夢！それと、日本のイメージなんかも聞いてみたいなあ。日本のことを知ってるのかなあ？

Q 今カンボジアの子どもに何ができると思う？

まずは知ること、かな？カンボジアについて知る機械ってあんまりないから、何をしたいのかよく分からないんだ。
ボランティアに興味はあるんだけど、それが行動に結びつかないって
いうか、きっかけがなくて、、募金とかならしやすいんだけどねえ。

さあ、カンボジアでの10日間の始まり始まり～

いざ、アランヤプラテートへ！

セブンイレブンやマクドナルドなど、東京さながらのバンコクの都会の風景から遠

ざかると、しばらく川沿いの道を走る。バンコクから少し離れれば風景は一変し、川の上に建つ家々や、川の水で洗濯をする人たちも見られた。けれど道路の逆側では、新しいホテルの建設が進んでいるという、何とも対照的な光景だ。タイ国内でも、まだまだ貧富の差があるようだ。5時間ほどバスに乗り、ようやく国境近くの町、アランプラテートに着いた。バンコク同様日差しが強い、帽子が手離せなくなりそうだ。

ホテルにチェックインした後、“トゥクトゥク”というバイクタクシーに乗って、国境近くの市場へ！風がすごく気持ちいい乗り物だけど、道路から巻き上げるホコリもすごい。

トーンちゃんとの出会い

更に取材に協力してくれる子どもたちを探していると、大きなおけを抱えた子どもたちに出会った。『仲良くなれるかな。。。』色々質問しようと思っても、緊張に戸惑いは隠せなかった。

子どもたちはみんな袋の中にぎっしり詰まった何かを持っている。よく見るとバツタだ！！これをカンボジア側で捕まえおけに溜め、1kg 200 Riel ぐらいで、この市場に食用として売りに来るそうだ。この炎天下の中、国境が開く7：30から、国境が閉じる前、5時前後まで、一日中働くそうだ。バツタを1kg 分集めるなんて、相当大変だろうに。。。。

そんな子どもたちの中で出会ったのが、トーンちゃん。とってもお茶目さんで、私も慶太もすぐに仲良くなれた。トーンちゃんのお陰で、やっと緊張がほぐれてきました。言葉は通じないけれど、笑顔があれば気持ちって通じるんですね。

私には10歳ぐらいに見えたトーンちゃんだけど、実際の年齢は14歳！！市場で見かける子は皆栄養不足で実年齢より幼く見えるみたい。髪の毛もそのせいで少し茶色っぽい。

トーンちゃんは含めその場にいた何人かの子どもを連れて市場の中で食事をする事になった。けれどレストランへ向かう途中、なぜかトーンちゃんの元気がありません。その日はバツタがあまり捕れず、家に帰るタクシー代がないそうだ。この仕事はやっぱり相当疲れるんだらうな。それに、子どもがそれだけの距離を毎日働きに来なければならぬなんて。。。。

日本の子どもたちがよほど珍しいのでしょうか。歩いていくうちに子どもの数はみるみる増え、レストランに入れないうち子どもたちがたくさんでてしまって可哀想なことをしてしまった。

集まってきた子どもたちに対して、周囲の大人は冷たかった。昨年レポーターが言っていたように、シッシツと追い払おうとしたり、笛をピー！と鳴らして子どもを散らそうとしたり。。。本来ならば働いている子どもたちを見守る立場なのに。。。“働く”というだけで辛い子どもたちが、これでは余計に辛くなってしまふ。。。。

市場に着くと・・・

トゥクトゥクを降りた最初の印象は“匂い”。生ゴミ、果物、魚、色んなものが混ざったもわっとした匂いだ。そして大きなダンボールやビニール袋を抱え、忙しそうに行き交う子どもたち。。。日本では決して見ることのない光景です。

市場自体はすごく広くて、まるで1つの街よう！！服、カバン、雑貨、魚、肉、香辛料などなど。それぞれのお店がある1種類の商品をお店いっぱいに置いている、といった感じでしょうか。スーパーマーケットのように色んな種類の商品を置いているお店は見られない。

最初に声を掛けたのは、赤ちゃんを抱いて物乞いをしに近づいてきた女の子。6歳ぐらいに見えたけれど、実年齢は8歳だという。。。“どうしたらいいんだろう”何かあげるべきなのかな。。。どうしていいか迷っているうちに、清水さん（カメラマンのスタッフの方）がコインを渡してあげました。

ここで物乞いをしている子どもたちは、もちろん家が貧しく、親が物乞いをさせている場合もある。けれど人身売買され、あるいは誘拐されて、トラフィッカー（子どもを買い、働かせている人）にカンボジアから連れてこられた場合も少なくないという。

もしもあの女の子がトラフィクト・チルドレン（人身売買された子ども）なら、あの赤ちゃんも、トラフィッカーが女の子とは全く関係のない子どもを、同情をひくために抱かせている可能性もあるという。。。そう、トラフィッカーが小さな子どもに物乞いをさせるのは、同情をひきやすいからなのだ。これではまるで子どもが道具のようだ。。。

コインを受けると女の子はすぐに、遠くで傍観していた男の人へとそれを渡しに行った。あの人はトラフィッカーなのだろうか。私たちがをにらみつけるかのようなあの冷たい視線が、今でも忘れられない。

さあ初インタビュー！

レストランに入った子とチャーハンを食べた。皆とっても美味しそう。しかもとってもお行儀がいい。市場へ来てから、子どもたちの礼儀正しさに度々感心させられました。物をもらうときも、手を合わせて軽くお辞儀をしてからもらうんです！日本の子どもも見習わなければなりませんなあ。。。

食べ終わってから、トーンちゃんにインタビュー開始！周りの子どもたちは皆カメラに興味津々。青木とも子さんとソフィアさん（現地のスタッフの方々）がそれぞれ日本語から英語に、英語からクメール語に訳しての、2人の通訳を介してのインタビ

ューだ。このときは少し、言葉の壁を感じた。

「学校は前は行ってたけど、今は働かなければならないから行っていません。仕事はやっぱり辛いし、体がだるいときもあるけど、私も働かないと生活していけないから。でも英語を勉強して将来は英語の先生になりたいの！」

そう自分の夢を語ってくれたトーンちゃん。最後には、質問していた慶太に逆質問！

「あなたの兄弟になってもいいですか？」

この言葉にどれほどの意味が込められていたかはわからないけれど、私には、トーンちゃんの心の奥の何かが込められているような気がしました。

こんなにたくましい14歳、日本にいるだろうか。日本の子ども、例えば自分が学校にも行けず、毎日暑い市場で働かなければならなかったら、、、ぐれてしまうかもしれない。

でも、文句は言っていない厳しい状況が、トーンちゃんの前にはあるのかもしれない。。。夕方、そろそろ国境が閉まる時間、トーンちゃんたちをゲートの前までお見送りです。バイバイ、トーンちゃん。気を付けて帰ってね。また明日会おうね！

市場へ Lets go！！

朝、再びトゥクトゥクに乗って国境付近へ。7時半に国境が開くと、カンボジア側から人々が一気に流れ込んできた。中には走っている人もいる。この国境を行き来するほとんどの人はカンボジアの人々だ。タイの方が裕福な国で品物が高く売れるため、毎日こちらの市場まで働きに来ているのだ。流れ込んでくる人々の中には、昨日のトーンちゃんたちの姿も！！昨日と同じ服を着ていた子もいたから、すぐに分かった。

この市場ではトーンちゃんたちのように、親がいる子どもだけではなく“トラフィックチルドレン”も働いていることは、昨日書いた通りだ。主に仕事は物乞い、花売り、キャンディー売りだけれど、14歳以上はバンコク周辺で売春させられるそう。。人間の価値がお金にかえられるはずなのに。

国境近くのコンビニで、若者の家から今ちょうど家に戻っているという、ティーア（18才）ティーラン（18才）と合流。

若者の家の子たちは皆帰る家がない、あるいは帰れる状況にないと思っていたから、少し驚いた。

2人と一緒にしばらく市場を取材していたけれど、お店の人に“この仕事は好きですか？”と聞くと、いつもこんな答えが返ってくる。

“他に選択肢がないからよ”

いざ、国境越え！！

手続きを済ませてカンボジア側へ向かう道には、タイとは違う光景が広がっていた。

道端の物乞いをする老人や地雷で手足を失った人々の列。物乞いに向け寄ってくる子どもたち。道を進むにつれ、ゴミやホコリ、匂いも増してくる。ここでは荷物検査も何もしないため、武器などを簡単に持ち込めてしまう治安の悪い場所だ。これはタイ側に戻るときの話だけれど、物乞いをする人々の列の中に、小さな男の子が混ざっていた。よく見ると両膝から下、片腕の肘から、もう片方の腕の指が全部ない。。地雷だ。

ほんとうに恐ろしいのは地雷ではない。

地雷を作り出す人の心だ。

こんなに幼い子どもから皆と走り回れる喜びを奪うなんて。。男の子は雨の中、ぶるぶるふるえていた。あの後あの子は、どうなってしまっただろう。

ティーアの家へ

国境付近から離れ、高床式の家々が点々と建ち並ぶ少し寂しい風景の中に、ティーアの家はあった。ティーアの家はここへ住む前は家がなく、線路のわきなどで生活しているときにティーアは生まれたという。ここへ住んでからも家は貧しく、十分な食べ物や勉強のできる環境がなかったために、ティーアは自分の意志で若者の家に入る決意をしたそうだ。現在はコンピューター修理の技術を勉強中。確かに貧しい家庭ではあるけど、家族に囲まれたティーアはとっても嬉しそう。そこには温かい家族の輪がありました。きっとティーアが勉強しようと思ったのも、家族のためを思ってじゃないかな。

ティーランの家へ

家、と言っても、そこに待っている家族はいません。建てたばかりの家の中には、まだ家具もありません。普通、若者の家の子どもたちには、両親もしくは片親がいます。けれど彼女は両親を共に亡くし、そしてここは、彼女のお母さんが残してくれた土地だそうだ。彼女は自らの意志で母親の土地に残り、裁縫の技術を生かし独立することを決めていた。

数週間後に控えた、たった1人での独立、これは若者の家でも初めてのケースで、とも子さんたちもとても心配していた。

けれど1番不安なはずのティーランは、弱音1つ吐かずに自分のこれからをしっかり見つめていた。

もし自分が18歳になっても、こんなにたくましく、こんなに強い女の子にはなれないだろうな。そのときのティーランは、とっても輝いていた。

若者の家へ！！

アランヤプラテートを出発して、いざバットンバンへ！そこにある『若者の家』に向かいます。バットンバンには『女子の家』と『男子の家』があり、それぞれ、約20人、約30人の元ストリートチルドレンやトラフィックチルドレンなど、何らかの事情で家に戻れない子どもたちが暮らしています。訪れる前はすごく緊張していたけど、予想以上のにぎやかさにビックリ＆一安心。皆積極的に話しかけてきてくれて、特に何人かいた英語を話せる子たちとは少し会話らしい会話ことができました。でも言葉は通じなくても大丈夫！カンボジア風のジャンケンのようなものを女の子たちが教えてくれたので、私も指相撲を教えてあげて、バトル開始！もちろん全勝でした？！

新たな趣味？！

夕食はトリーヤやカユたち男の子3人、女の子3人とレストランでお食事。カユやトリーヤは少し英語が話せて、ボーイフレンドやガールフレンドの話で盛り上がった。なんでもトリーヤには、同じ若者の家の女子の家に住んでいるガールフレンドがいるらしい！見てみた～いい！ハンバーガーやピザを食べながら写真を撮り合って遊んだ後、皆でレストラン内にあったビリヤードで遊びました。トリーヤとソキアがどんどん球を落としていく中で、ビリヤード初体験の慶太と私はかなり苦戦。空振りすることもしばしば。。。そこへ皆のリーダー、リッティー登場！彼にかかると球がまるで生き物のようにポンポンと落ちていくんです！！これには慶太も私もただただ啞然。けれど私たちにもとっても丁寧にコツを教えてくれて、初心者私たちもあっという間に上達しました（?!）色んな遊びを通して、色んな子たちと仲良くなれた、とても充実した1日でした。

バレー大好き！！

お昼ご飯を食べて、男子の家で自己紹介ゲームや鬼ごっこをした後は、私はお土産に持ってきたバレーボールで円陣、慶太もサッカーボールでサッカー。皆運動神経抜群で、終わった頃には2人とも汗びっしょり。でも皆と遊んで、チャンター、ワナ、タイ、リッティ、トリーヤ、友達がいっぱいできました。

そんな訳で、2人が準備してきたプレゼンテーション“日本の紹介”も緊張せずに、むしろ楽しんで終わることができました。スポーツっていいなあ。どんなに言葉が通じなくても、皆が楽しめるんだもん。言葉じゃなくて、体のコミュニケーションだもんね。もしかしたらスポーツは万国共通語かもしれない！

刑務所の中では

朝、バタンバン市内の刑務所見学へと向かいます。二重の壁の中は意外と広々していて、緑も多く、バレーコートもあります。たくさんの青い囚人服を着た人々の中には、子どもたちの姿も目立ちました。

KnKが行っている、刑務所内での子どもたちの授業を見学することに。識字の勉強から必要とされることごと、そうでない子たち2クラスを合わせると、だいたい50人ぐらいだろうか。今年始めたばかりのプロジェクトだが、子どもたちの表情は少しずつ変わってきたという。

犯した罪は様々だけれど、貧しさ故に盗みを働いて捕まった子どもも多い。けれど裁判官の数は不足し、その上弁護士はお金がなければ雇えないため、裁判まで数か月待たされた上、何の弁護も受けられずに裁判が進んで行ってしまう。。

ここで教育を受け、ここを出た後少しでもしっかりした道を歩けるようになってほしい。。生きるためにしたことが罪になってしまうなんて悲しすぎるから。

皆のインタビュー

さて、仲良くなったところで、皆にインタビューです。

チャンター : 僕は前タイで働いていたんだけど、KnKに入ってから、それまであった生活の不安がなくなって、安心して暮らせるようになった。将来は英語の先生になりたいな。あと、NGOでも働いてみたい。

タイ : 僕もチャンターと同じで前はタイで働いていたんだ。そして将来は僕も先生になって、色んな子どもたちに勉強を教えてあげたい。

- チャンター : 普段は職業訓練から帰った後、英語の学校、それから
(女の子) 若者の家で識字の勉強をするの。なかなか忙しい毎日よ。
- トーン : 私にとって1番大切な言葉は“知識”。知識があれば、
色んな職に就けるし、自分の可能性が広がるわ。

トーンの答えは“1番大切な言葉は何ですか？”という質問に対して。これはチャンター(男の子)も同じ答えでした。勉強ができること、その重要性をしっかりと自覚していて、私も見習わねばと思いました。そしてここでの“勉強”がとても貴重なものであることも、同時に感じました。

バツバン巡り

トーン、チャンター 女の子2人、チャンター、ターイ 男の子2人に、バツバンを案内してもらい、女の子2人の職業訓練所にも行きました。トーンは美容院で勉強して2年目。将来は美容院のオーナーになるのが夢だそう。すっかりトーンに前髪を切ってもらった私 慣れた手つきだけど、その顔はとても真剣。私もあっという間に美人に変身？！

チャンターの通う裁縫の学校も見学。ちょうど同じ若者の家から来ていた女の子にインタビュー。けれど“この訓練は好きですか？”という質問に対して、その子は少し戸惑っていました。そのときふと、市場で取材した人々の言葉を思い出したのです。“他に選択肢がないからよ”。カンボジアの現実はまだまだ厳しいようです。

その後3～15歳ほどの子どもたちが50人ほど暮らす「ホームランド」へ。ここでもやはりバレーボールが好評でした。楽しんでもらえてよかった。でも小さな子たちにしてはちょっと元気がなかったかな。幼いからこそ、心の傷は負いやすく、表に現れやすいのではないだろうか。

最高の夜！！

その夜、カユ、ティーラン、ダラの3人の女の子の卒業パーティと、8月の誕生パーティを兼ねた大パーティ(?!)ダンスの後には2つの劇、1つはトラフィックチルドレン、1つはシンナーを吸う子どもの話。トリーヤやチャンターの迫真の演技に圧倒されたけど、きっと同じような体験を持っているから、リアリティがあるのかもしれない。

その後はもうはちゃめちゃ！ケーキを顔に塗り合うやら、格闘するやら腕相撲やら。。。すり傷はできるし、ズボンが破れるし、顔や髪はケーキでベタベタ。とても女

の子扱いしてくれているとは思えない(笑)もちろん格闘や腕相撲はボロ負け。でも、あれが彼らなりの歓迎の仕方だったのかな？！

こんなにはちゃめちゃな夜も、こんなにはしゃいだ夜も、初めてでした。
いざシェムリアップへ！

若者の家にさよならを言って、ソフィア、ソポン 女の子2人、リオ、テオン 男の子2人と一緒に2泊3日のアンコールワット遺跡巡りへ！

今思うと、この旅を通じてこの4人とは1番仲良くなれたんじゃないかな。言葉はよく分からないままだったけれど、本当に皆とは笑いが絶えなかったよ。

笑いあり、涙あり、とても内容の濃い2泊3日を、どうぞご覧あれ～。

まずはアンコール・トム

1日目ホテルからまず向かったのは、アンコール・トム遺跡。堀を越え、城壁を越えると、そこには広大な庭と遠くで待ち構えている古いお城。近づくにつれてその迫力には圧倒されました。ここからテオンがカメラマンに早変わり。ビデオ撮影に夢中になってました。お城の中もやっぱり迫力があります。色んな模様や絵の描かれた石の壁に沿って歩いていくと。。

どへ～急な階段にぶつかってしまいました。さぁ、のぼるぞ～。テオンはあっという間に上がってしまって、それを必死に追いかけるけれど、、、どこからともなく“ここで落ちて死んだ人もいるんだよ～”という魔の声。ふう～こわかった。何とか階段をのぼり終えて一息つくと、皆にインタビュー！しかし。。突然のスコールに、中断。

2日目のアンコールワット！！

見てくださいこの写真！！いかにも古い遺跡、といった感じを、この木が物語っていますよね。遺跡の周りにジャングルがあるというよりは、遺跡がジャングルの一部のような感じでした。皆朝からハイテンション。ちょっぴり探検気分も加わって、一日中ハイでした！

・・・とはいきませんでした

像のバルコニーに座った皆の口から語られた過去は、その笑顔からは想像もできない程の過去でした。

今でも、皆の目に浮かんだ涙が忘れられない。。。

アンコールワットの遺跡の周りでも、たくさん子どもたちが本を売ったり、おもちゃやお土産を売ったり、物乞いをしたりして働いている子どもたちをたくさん見かけました。悠々と遺跡巡りを楽しむ外国人観光客と、炎天下の中働く子どもたち。そこにはあまりにも対照的で、不自然な光景がありました。

I have a family

この2泊3日の旅の中で、1番印象に残った言葉があります。“Now, I have a family”。スタッフの方々がそれぞれおじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、そして私たちは兄弟姉妹、そんなことをふと口にしたのはテオンでした。

確かに、KnKは家族のように温かい輪の中にあると思います。けれど私には、テオンが本当の自分の家族を思い浮かべながら言った一言のように思えました。自分の存在の意味を教えてくれる人、それは友達でもあり、周りの大人でもあり、ただどやっぱり1番は両親なんじゃないかな。だって両親がいなかったら、“自分”は存在しなかったんだもん。

最後まで涙を1度も見せなかったテオンだけど、テオンにも本当の家族と一緒に暮らせて、笑い合える日が来るといいな。

KnKに来る前は。。

テオン ボクは人身売買されて、ベトナム人のトラフィッカーにタイに連れていかれたんだ。最初は女の子と一緒に働いていたんだけど、女の子は稼ぎが悪くてよく殴られてた。そのうち女の子がタイの警察に捕まってしまう(トラフィックトチルドレンは不法入国になります)トラフィッカーは別の男の子と、老人を2人連れてきたんだ。その男の子の稼ぎがよくて、今度は僕が殴られるようになっちゃった。その上トラフィッカーは僕に物乞いしてこいって言うんだ！それが嫌でそこを逃げ出して、タイの警察に捕まって、カンボジアに戻された。どうしてこんなこと話しても泣かないかって？この2年間ずっと泣いてばかりいたから、もう泣くのはやめにしたんだ。

僕は全部話すよ！と言って話し始めたテオン。とってもかっこよかった。でも、本当は皆と泣きたかったかもしれない。

ソフィア 彼女のインタビューは時間がなくてできなかったけれど、以前インタビューをしたことのある清水さんによると。。
彼女もやはりタイで働かされていたトラフィックチルドレンの1人だった。彼女自身は花売りやキャンディー売りをしていたと言うのだが。。稼いでいた額を聞くと明らかにそれだけでは稼げない額だという。本人は決して語らないけれど、タイで売春させられていたらしい。16歳、私と同じ年、彼女の心の傷は図り知れません。女性を商品として扱う大人さえいなければ、こんな思いをする女の子はいないはずなのに。。売春目的のツアーに参加する日本人も少なくないという。私にはその価値観が信じられない。
ソフィアの心の傷は、決して消えることはないだろう。でも彼女を傷つけた大人は、今もどこかで誰かを傷つけているのではないかと思うとぞっとする。。

ソポン 私は昔、プノンペンでお父さん、お母さん、弟と住んでいたの。けどお父さんとお母さんはいつもケンカばかり。それを見ているのはいつも辛かったわ。そのうちお母さんは私と弟を連れてタイに働きに出て行ったの。トラフィックカーに連れられて、何日も食べ物が無かったり、警察におびえたり、ジャングルの中をさ迷い歩いたときは本当に怖かったわ。やっと目的地に着いてキャンディー売りなんかをしていたけれど、私だけタイの警察に捕まってしまったの。今でもお母さんや弟はきっとろくにいい物も食べられずに、タイのどこかで働いているわ。だから若者の家で寝る場所があってお肉なんかも食べれることがすごく申し訳なくて。。本当は長女だからお母さんを色々助けてあげなくちゃいけないけど、将来いい職に就いて家族を助けるためにも、今は家族のことは忘れて勉強しなくちゃ。。

長女として、娘としての責任感、そして、家族を想う気持ちに胸を打たれました。。

リオ 僕は家族皆でカンボジアで暮らしていたんだけど、ある時、おばさんに借金があることが分かったんだ。そこで家族は皆タイに働きに行ってしまうと、僕だけが残されてしまったんだ。7年生に上がってテストを受ける予定だったけど、先生に渡す用紙代がなくて。。何とかそのテストは受けられたんだけどすごく悪い点数を取っちゃった。。
そのうちタイにいたおばさんが僕を引き取りに来てくれたんだけど、おばさんは別の工場で働きながらそこに住むことになってしまって、すごく寂しかった。
その上おじさんが僕に暴力を振るってきて、1度おばさんのところま

で逃げて行った。そのときおばさんが“お正月に迎えに行ってお金をあげて”って約束してくれて、次に暴力を振られたときは我慢したよ。でも3回目に暴力を振られたときは我慢できなくて、おじさんの家から逃げ出して、僕をタイの警察に捕まえてもらったんだ。おじさんからは逃げられたけど、刑務所で出てくる食事ときたら！豚や犬に食べさせるようなものなんだ！カンボジアに帰ってきてから、おじさんに“お金をあげるから戻っておいで”って言われたけど、僕は絶対戻らない。

辛い環境でずっと耐えてきたリオ。けど、殴られたときに本当に痛かったのは、リオの体ではなくリオの心だったと思う。

これだけ辛い経験をしてきた皆、けれど“世の中は平等だと思いますか？”という質問に対して、全員が口を揃えて“Yes”と答えたのにとっても驚きました。もしも今日本の子どもたちが、皆と同じ経験をしたら。。。もし自分だったら、ぐれてしまうかもしれない。ひねくれた性格になってしまうかもしれない。けれど皆は、自分たちの辛い経験を、人への優しさに変えていた気がします。皆は、日本の子どもが豊かさの中で失ってしまった強さ、素直さを持っていました。自分たちに与えられた環境の中で精一杯生きてきた皆、そんな素直な気持ちをもてあそんでいるトラフィッカーたちが、本当に許せない。子どもはおもちゃじゃない。都合よく働いてくれるロボットでもない。1人の人間として、誰にも奪えない権利を持っているんです。

お別れ。。

それは昨日の夜の事です。私のカンボジア語の本を持って、ソフィアが何かの言葉を必死に探しています。“何を探しているのかな？”その言葉は中々見つからないらしく、やがてソフィアの中から涙がポロポロこぼれてきた。そしてやっと見つかった言葉は“いつまた来ますか？”これには私もきっと、必ず帰ってくるよ！その日はソフィアと2人で1つのベッドに寝ました。

次の日、シェムリアップ空港で、皆とはお別れ。最後まで手を振ってくれた姿は今でもはっきり覚えています。

いくら言葉を知っていても、気持ちがなければ何も伝わらない。逆に本当に伝えたいことがあれば、気持ちは言葉を越えられる、それは正に笑顔の力でした。皆には、色々な事を教えてもらったよ、ありがとう。また必ず会おうね！

本日は Off

空港に着くと、首都プノンペンだけあって、交通量の多い都会の街並みが広がっていた。今日は疲れが溜まっていることだし off にしましょう。市場で安い洋服や靴を衝動買い。日本では考えられないくらい物価が安いのだ。

市場の中でも地雷で足を失った人々に度々出会う。そう、バタンバンでもプノンペンでも、カンボジアのいたる所で地雷の被害者の方を見かける。今でも年間200～300人の人がその被害に遭っているという。人として誰にも奪えない権利を、自らの足で踏ませ簡単に奪っていく地雷。けれど国境近くの市場では、手だけでこげるリヤカーを作り、一生懸命働いている被害者の方もいました。体の一部を失っても尚強く立ち上がろうとしている人々がそこにいました。

プノンペンの若者の家

夜、プノンペンの若者の家へ寄ってから皆で夕食へ。そこで生活している男の子は、全部で10人。中には二十歳を越えている人もいてビックリしました。バタンバンで学べないより高度な技術を学びたい青年が、ここで生活している。食事の席で私の席の隣だったのは、バナ（21歳）、今コンピューター関係の勉強をしている。その隣は若者の家でエデュケーターをしているラタナックさん。ラタナックさんはムービーつきのケータイを持っていてかなりビックリ！日本のケータイと変わらないくらい画質もキレイ！！ケータイ自体あまり普及していないカンボジアでは相当珍しいものだろう。

2人ともかなり英語ができて、私も何とか英語のありったけの知識を引き出して会話ができました。バナは日本語学校で勉強していたことがあるらしく、私に平仮名を書いて見せてくれました。思わぬ日本とカンボジアのつながりに少し嬉しくなりました！

ゴミ山では今。。

車を降りるやいなや、肺の奥まで入りこんでくるかのような、もわっとした生ゴミの匂いに包まれた。ここはプノンペンの都市部からそう遠くないゴミ山だ。ここでは何百人もの人々がプラスチック、鉄、缶などを拾ってお金にかえて生活しているそうだ。そのうち子どもは250人、13歳以下に関しては200人もの子どもが、大人と一緒にここで働いている。ゴミを乗せたトラックが来ると、少しでもいいゴミを拾おうと、人々が群がる。けれどトラックはお構いなしに、乱暴な運転を続ける。子どもがトラックに轢かれる事故も少なくないそうだ。

フィリピンのゴミ山では、掘ると子どもの死体が出てくるともあると言う。周りの大人も、轢かれた子どもに構っていることができないほど、自分の生活に余裕がないのだ。

好きでここで生活している人々はいないだろう。けれど、ここで働くしか“選択肢”がない人々がこれだけいるのだ。

自分たちのいらなくなった物が、ゴミ山の人々の生活の糧になっているかと思うと、複雑な気持ちでいっぱいだった。

まるで別世界！！

お昼ご飯を食べた後、皆で王宮を見学。いやあ、金銀キラキラのキレイな建物からよく手入れされた広い庭、そして王宮内にお寺まで。デザインも日本とは大分違って、豪華な風格です。カンボジアの人々は王室をととても尊敬しているらしく、街のいたるところでシアヌーク殿下の写真を目にしました。

ゴミ山のふもとの NGO

ゴミ山のふもとには、NGO が運営する床屋、美容院の訓練所、そして識字教育の教室があった。現在200人の子どもたちがここで通っているという。通っていると言っても、1日学校にいることはできない。半日はゴミ山で働かないと生活していけないからだ。そして今だゴミ山の子ども20%が教育を受けていない状態だそうだ。NGOのスタッフの方々が、そうした家族の説得に回ってはいるものの。。。家族の方々も、今子どもに教育を受けさせたほうが“先”のことを考えればためになることは分かっているでしょう。けれど頭では分かっている、それぞれが“今”を生きるのに必死で“先”のことを考える余裕がないのだ。現在、ここを卒業した生徒は294人。けれどしっかりした職につける保証は、この国の現状にはない。

食べ物を売っているお店があり、人もたくさんいるとあって、まるで都会の中に突然現れた1つの町のようなゴミ山。あの場所が“街”ではなく子どもたちが皆笑顔で学校へ通えるようになってほしい。

2度目の日本の紹介

夜、再びプノンペンの若者の家を訪れると、丁度皆は授業中。ちょっと中断させてもらって、私たちの2度目の日本の紹介。バタンバンのとくと違い、少人数相手なので逆にとっても緊張。慶太は一通り紹介が終わると、得意の伝統太鼓を椅子とおは

しを使って再現してくれました。椅子が太鼓、おはしがばち。その真剣な姿に皆で拍手。

この日私は綾子さんに助けてもらいながら、英語での紹介に挑戦！したのですが、、、いやぁ、ぼろぼろでした。それでも何とか皆に分かってもらえて嬉しかったぁ 綾子さん、ありがとうございました m(_ _)m

職業訓練所にて

まずカカダの通っている車の修理工場へ。ここではおよそ2年の研修を受けてから正社員になれるそうだ。カカダはまだ今年はじめたばかり。「ここでは車の修理の勉強だけじゃなくて、理論の勉強なんかも教えてくれるんだ。車修理のための教科書もちゃんとくれるよ。ここが終われば英語の学校、夜は若者の家で識字の勉強をするよ」と、忙しい毎日を語ってくれたカカダ。先生の指導を受けながら作業に取り組む姿は、真剣そのものでした。

その後、ビックの通う木彫りの職業訓練所へ。私たちが到着したとき、ビックは丁度作業中、仏像を彫っているところでした。ボタンバンの若者の家にいた頃から3年間木彫りの技術を学び、都市部でより良い先生のもとで学ぶために、去年、プノンペンの若者の家で生活する最初の男の子になったそうだ。

木彫りを始めて5年目、その手先の器用さに思わず見入ってしまいます。いつもは元気いっぱいのビックもこのときはすごい集中力！きっとビックなら、いい職人さんになれるよ。

さよなら、カンボジア

若者の家の皆とお別れして、再びプノンペンの空港からバンコクへ。ここで綾子さんや、しばらく残る予定の清水さん、そしてカンボジアとお別れです。

“ 帰りたくないなぁ。。。 ”

国境や若者の家でできた友達と、もう1度会いたい。

ここへ来る前はただ漠然と、“苦しんでいる子どもたちのために何かをしたい”と思っていたけれど、今はこの旅を通じて友達になった子たちの経験を直に聞くことにより、自分の気持ちが前よりずっとはっきりした、強いものになった気がします。遠い国の声から、友達の声へと変わったから。。。

同時に、豊かさの中で失っていた笑顔、気力を、皆で私に気付かせてくれました。毎日を楽しむも楽しまないも自分次第、楽しいものはできるかは、自分にかかっている、それを出会った子たちは皆よく知っていました。

ありがとう、皆！
また絶対戻ってくるからね！！

悲しいの？寂しいの？
だったら目を閉じてごらん
あなたの心の中には
いろんな人が住んでいる
あの子も、私も
二度と会えないあの人も
目を閉じればいつでも会える
あなたが消えてしまったら
あなたの中に住んでいる人も
その人との思い出も
皆みんな消えてしまうの
だからあなたは
一人じゃない

この光の向こうには
一体何が待っているんだろう
通りすぎてきた道は消せないけど
過去のない「今」もない
そして、今のない「未来」もまたない
もう闇には逃げたくない

ただいまぁ！！

日本の皆にお答えします！！

A カンボジアのイメージ

確かに、貧しい家々が並んでいたり、地雷で手足を失った人や働いている子どもをいたるところで見かけてすごくショックだった。でもね、人と目が合うと必ずと言っていいほど笑顔が返ってくるの！人と人とのつながりが温かかったよ。逆に日本に戻ってきて、無表情に急ぎ足に通り過ぎてく人々を見てがっくりきちゃった。本当に“貧しい”国って、どっちなんだろうね。

A ストリートチルドレン、トラフィック・チルドレン

ストリートチルドレンは必ずしも孤児じゃなくって、片親、両親がいる子のほうが多いんだ。けど、家が貧しかったり、貧しさから親に暴力をふられたりして路上に働きに来るの。トラフィック・チルドレンは、、貧しさから子どもが人身売買されて、隣の国のタイで働かされるの。人間の価値はお金にかえられるはずなのにね。。

A 皆のインタビュー

なりたい職業は様々、でもそれぞれ皆夢をしっかり持っていたよ！NGO で働いてみたいというのが印象的だったなぁ。
日本のイメージは様々で、名前しか知らないなあって子もいれば、日本語学校で勉強してて、平仮名が書けたり、日本語であいさつしてくれた子もいて、びっくりしたし、嬉しかったなぁ！

A 今私たちができること

その通り、まずは知ること！何事も知ることなしでは考えることはできないし、考えることが自然な思いやりへの第一歩だと思うんだ。そしたらきっと見えてくるはずだよ。今自分にはどんな行動がとれるか。私みたいに平凡～な人間でも、こうやって何かができただし。身近にできることって、いっぱいあるはずだよ？例えば色んなことを知っていても、傍観者になったら意味がないから。

KnK がもし100人の家族だったら

～この旅を通して～

10日間のカンボジア

けど、寂しいと思ったことはありませんでした

KnK がまるで1つの家族のように

温かい輪の中にあっただから

KnK がもし100人の家族だとしたら...

珠理さんはお母さんです

いつも皆に元気をくれます

綾子さんととも子さんはお姉さんです

いつも子どもたちを真剣に

そして優しく包み込んでくれます

清水さんはお兄さんです

皆の大事な思い出を残してくれます

この家族には、たくさん子どもたちがいます

フィリピンに、カンボジアに、ベトナムに、そして日本にも

背負った過去は違うけれど、

話せる言葉は違うけれど、

もっと大切な「今」を見ているから、

心から伝いたいことがあるから、

皆大切な兄弟姉妹です

この家族に、血のつながりはありません

つながっているのは笑顔です

おわりに

エガオがイチバン

カンボジアを訪れる前に、私には1つの不安がありました。学校に行けるのが当たり前、家には家族が待っているのが当たり前、そんな環境の違いが、現地の子どもたちとの壁にならないかどうか。。。けれど2つの文化を越えるのに、2つの言葉を越えるのには笑顔1つで十分でした。こんなに衝撃を受けた十日間も初めてでした。背負った過去はそれぞれ違います。その笑顔の裏には、信じられないほど辛い経験を秘めている子たちがたくさんいました。けれどもお互いの「今」を見つめ「今」を生きようとする力が、お互いの距離をぐっと近づけてくれたのでしょうか。人間は辛いときほど笑顔で生きようとするときがあります。彼らの笑顔から、その「今」を生きようとする力を一番感じました。

日本に帰ってきて残念に思ったことがあります。周りを見ても、目的地に着くことだけを考え、人と目を合わせることを避けているこのような人々の群れ。

人と人とのつながりの温かさを感じられた街中、足を止めている暇などないかのような街中、本当に貧しいのは、どちらなのでしょうか。。。

今、世界はとてもアンバランスです。取材中にもあまりの日本との環境の差に、たびたび言葉に詰まってしまいました。でもそれは、貧しい国と豊かな国があまりに極端だということでしょう。。。いつか貧しい国と豊かな国が互いに歩み寄り、お互いの距離の真ん中で出会えるように、お互いの差がなくなることを願っています。

2003年 夏休み友情のレポーター 安田 菜津紀

注) 文中に登場する子どもの名前は仮名にしてあります。